

薛己の用いた隔物灸

上田 善信

日本鍼灸研究会

はじめに

薛己(1487~1559)は、江蘇呉興(現在の蘇州市)の人で、字を新甫といい、立斎と号した。明代を代表する温補学派の名医である。幼少の頃より外科・小児科の名医である父・薛鑑に家学である医を学び、各科に通曉したが、特に外科に長じた。正徳年間(1506~1521)には南京の太医院御医に、嘉靖年間(1522~1566)には北京の太医院に入って太医院使などを歴任した。易水学派、特に李杲の影響を大きく受け、脾腎を温補することの重要性を唱え、後世に大きな影響を与えた。各科にわたる多くの著書を遺したほか、陳自明『婦人大全良方』、錢乙『小兒藥證直訣』、王綸『明医雜著』など過去の医書の校訂刊行にも従事し、没後に自他の著作を集成した叢書『薛氏医案』が何種類も刊行された。薛己の著作は日本の近世医学にも大きな影響を及ぼしている。

薛己は治療において本末虚実などの弁証施治の原則を主張し、胃気を補養することを重んじるとともに、服薬飲食に対しても注意を配り、重要な治療法の一つとして、しばしば砭鍼や灸法(特に隔物灸)を用いた。灸法については、明代に考案された桑枝灸や神灯照法なども用いるが、多くは大蒜や豆豉などを使った隔物灸を重用し、施灸の前後に薬剤を用いる并用治療を特徴とする。特に隔物灸については、著書『外科發揮』巻二・発背・附方の隔蒜灸において「蓋火以暢達拔引鬱毒，此從治之法也，有回生之功」とその有効性を述べている。以下、薛己の著書に見える隔物灸について報告する。

薛己の自著に見られる隔物灸

薛己の自著である『外科心法』(1528)、『外科經驗方』(1528)、『外科發揮』(1528)、『口齒類要』(1529)、『内科摘要』(1545)、『女科撮要』(1545)、『保嬰金鏡録』(1550)、『癘瘍機要』(1554)、『外科枢要』(1571)の九書のうち、『内科摘要』『保嬰金鏡録』『癘瘍機要』の三書には隔物灸の記載が見られない。他の六書のうちでは、特に外科書において、先行する多くの外科書や方書(『外科精要』『外科精義』『衛生宝鑑』『玉機微義』『医経小学』)の引用を通じて、多量の隔物灸の記述が見られる。外科書以外の『女科撮要』と『口齒類要』にも隔物灸の記述があるが、やはり外科疾患を対象としている。ちなみに当時、一般に隔物灸は傷寒、秘結、霍乱、淋閉、小便不通などにも使用されていたが、薛己は『口齒類要』蛇入七竅及虫咬傷十一以外では、全て瘡、癰などの外科疾患に限定して用いている。

隔物灸に使用される薬物は大蒜、豆豉、附子、香附、木香の五種で、大蒜以外はすべて餅子状にして用いている。特に大蒜を頻用し、豆豉、附子がそれに次ぐ。『外科發揮』にはその主治が述べられていて、大蒜は「治一切瘡毒大痛，或不痛，或麻木，……其毒隨火而散」，豆豉は「治瘡瘍腫硬不潰，及潰而不斂，并一切頑惡瘡」，附子は「治潰瘍氣血虛，不能收斂，或風邪襲之，以致氣血不通，運於瘡所，不能收斂」とあり、主治別に薬剤の使い分けがなされている。使用する薬剤については大蒜の多用が特徴的である。これは使用の際は概ね切片にするが、楊梅瘡、虫犬傷、鶴膝風などの病證では搗爛したものを用いている。使用する薬剤の大きさは患部の大きさにより加減されており、その厚さは切片、餅子にかかわらず「三錢厚」「三分」が多く見られる。施灸の壮数は「如痛者灸至不痛，不痛者灸至痛」とあるように、施灸時の痛みの有無を目安とする。ただ隔蒜灸については数壮から百壮までの指示がある。治験例においては、概ね多壮灸(十の倍数、すなわち二十、三十、五十など)となっている。